

二つの春

(平成二十五年 度寮歌)

丸田潤君 作歌・作曲

一

降りしく雪は終るを知らず、未だ窓下には白銀の町。
されど陽光は日毎に増して、春の訪れを微かに予感う。
幾許もせず別離の時は来て、寮で過ごせし日は想出となる。
雪上の足跡融け去り消ゆるよに、巢立つ若芽も晩冬と共に去り行く。

二

残雪融かす春風吹きて、原始林陰に萌ゆる新芽は踊る。
生命の鐘声は北都を巡り、長き寒冬の影は消え往く。
去りし寮友との月日胸にして、新たなる一年の扉を開く。
若き我等の熱き血滾らせて、ひたすらに只青春を歩みて行かん。